中谷宇吉郎 雪の科学館 通信特別号
〔15年度企画展報告〕
2004(平成16).3.31
NAKAYA UKICHIRO MUSEUM OF SNOW AND ICE
発行／中谷宇吉郎 雪の科学館
〒922-0411 石川県加賀市潮津町イ106番地
TEL 0761-75-3323 FAX 0761-75-8088
URL▶http://www.city.kaga.ishikawa.jp/yuki/
E-mail▶yuki-mus@blue.hokuriku.ne.jp

（平成15年6月19日～10月21日開催）

企画展／若き日の宇吉郎－幼少から四高時代まで－

中央：宇吉郎が8才のときの書「百事如意」
右　：錦城小学校の明治44年度(宇吉郎が5年生のとき)の作品をまとめた掛軸。
　　中央やや右に宇吉郎の竹の絵がある
左　：浅井一毫(宇吉郎が1年のとき下宿)の書と一毫の兄・竹内吟秋の画の掛軸。
　　「二葉より千年能(の)色や松の花」一毫と吟秋はともに九谷焼の名工

1900年(明治33年)に生まれた宇吉郎は、幼少期を片山津温泉の生家で過ごし、6才の時から母の実家や親戚に預けられて大聖寺の京逵幼稚園、錦城小学校に通い、その後、小松中学、金沢の第四高等学校で学びました。

この企画展では、後に科学者、随筆家として活躍する宇吉郎の成長の過程を、加賀の風土や文化、さまざまな出会いなどを通して発見していくことをめざして、若き日の歩みをたどりました。

本格ものと驚きと－宇吉郎の子ども時代

昨年(2003)、雪の科学館は企画展「若き日の宇吉郎－幼少から四高時代まで－」を開催したが、その時展示した宇吉郎8歳の時の書「百事如意」(万事思いのままの意)の人気が高かった。子どもが書いたとは思えないような堂々とした字だ、という評価である。

宇吉郎は1900年、現在の加賀市片山津温泉で生まれた。美しい自然の中で遊び、のびのびと育った。6歳の時、宇吉郎は片山津にできた病院の看板を書き、大人をあっと驚かせたという。看板は今は残っていないが、8歳の書を見ると、なるほどと思えてくる。

画・高木洋太郎

宇吉郎の才能を見抜いた両親は、当時、江沼郡内で最も教育力が高いとされた大聖寺の錦城小学校に入れるため、幼稚園の時から大聖寺の親戚などに下宿させた。土・日だけ片山津の親元に帰る生活が、6歳の時から始まったのである。

大聖寺は、前田の支藩があったところで、歴史と文化のある町だった。1年の時は九谷焼の名工・浅井一毫(いちもう)の所に下宿した。宇吉郎は、茶碗を籾殻(もみがら)で力一杯擦(こす)る手伝いをして、九谷焼の知識を身につけた。

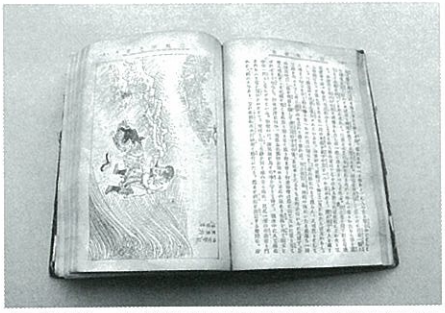
2年の時からは、旧藩主前田利鬯(としか)に家令(かれい)(＊)として仕えた松見家に下宿した。松見家の祖母に連れられ、「御殿」と呼ばれた旧藩主宅に出かけた。ご前様(奥方)は、宇吉郎が行くと、上座からそばまでおりてきて、学校でのできごとや、町の様子などを尋ねた。宇吉郎はご前様とお話するのが楽しくて、その頃読んだおとぎ話などを得意になってお話した。下宿では、難しい漢字が一杯ある『西遊記』などを、夢中になって読んだ。

恩師で物理学者の寺田寅彦と一緒に研究していた頃、宇吉郎は随筆「御殿の生活」を書いた。子ども時代をふり返り、「昼は本当の自然の探究者として実験を進め、夜はひき籠(こも)って古典的な名著を読むような本格の生活をしてみたいと思うことがある。」しかし…、と自らを省みて、「このような時には、理由なく昔の御殿の生活が懐かしく思い返されてくる。」と記している。ご前様の前でお話したことも、難しい漢字一杯の『西遊記』に熱中したことも、九谷焼の名工から直接習ったことも、本格ものと交わった生活として、回顧されたのではないだろうか。

明治末期の子ども時代、まだ近代的な考え方はなかった。小学校の裏山には、落城伝説とからまって、簪(かんざし)をさした蛇や双頭の蛇がいるといううわさがあり、子どもたちは誰もそれを疑わなかった。5年生の時、新しく来た先生は、カント・ラプラスの星雲説を説明してくれたが、それは宇吉郎にとって大きな驚きであった。渦巻く星雲すらもなかったころの宇宙創世の日を頭に描いた。仏壇で、おまいりの座につき、燈明の光がゆらぐのを見ながら、生まれたばかりの星雲の姿を想い浮かべたりした。

随筆「簪をさした蛇」で、宇吉郎は、驚きや不思議を感じる体験がいかに大切であるかを述べている。「本統の科学というものは、自然に対する純真な驚異の念から出発すべきものである。不思議を解決するばかりが科学ではなく、平凡な世界の中に不思議を感ずることも重要な要素であろう。」そして、「眼に見えない星雲の渦巻く虚空(こくう)と、簪をさした蛇とは、私にとっては、自分の科学の母胎(ぼたい)である。」と。

本格ものにふれ、不思議に驚いた子ども時代こそ、後に科学や随筆で活躍する宇吉郎の土台になった、と思われる。(神田)



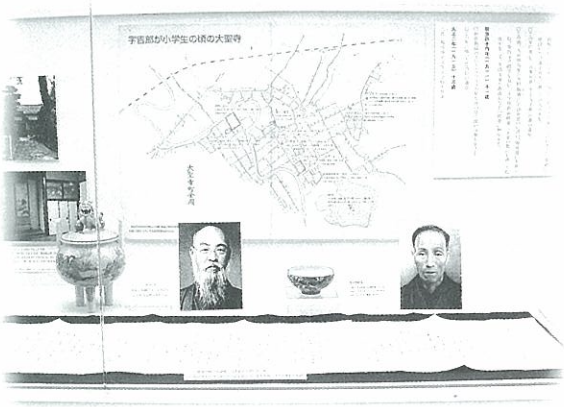
『西遊記』（明治29年博文館発行の帝国文庫）

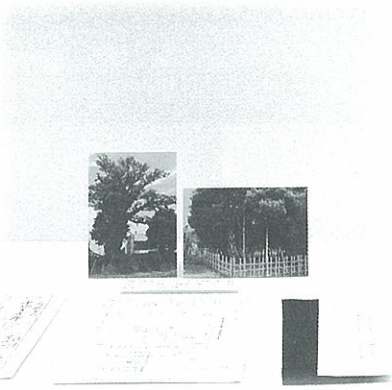
(＊)皇族や華族の家の事務・会計を管理し、使用人の監督に当たった人(大辞泉より)

『いしかわ人は自然人』2004.1.1(No.66)の第2特集「石川県ゆかりの自然人・中谷宇吉郎」(p.50～57)(神田編)に掲載した原稿の一つ(p.54)を転載した。

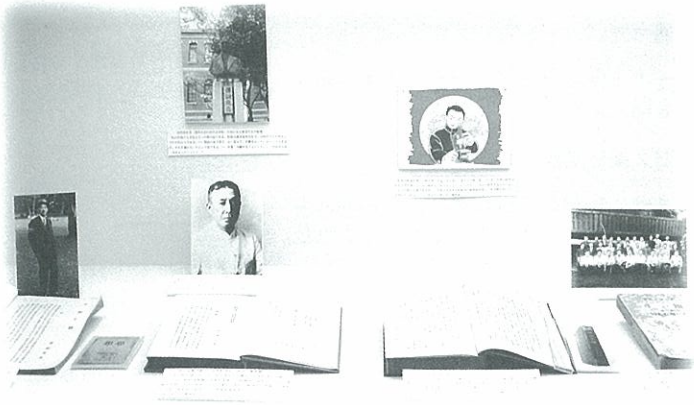
資料協力

加賀市立錦城小
国土地理院北陸
金沢市立ふるさ
(財)呉竹文庫，
中谷芙二子，森
湯浅治男，法安
大森一彦，加藤





校，石川県立小松高等学校，石川県立大聖寺高等学校，
方測量部，石川県立歴史博物館，石川県九谷焼美術館，
偉人館，加賀市歴史民俗資料館，石川県立図書館，
賀市図書館，サントリー株式会社，
侑士，竹内昭一郎，納谷健雄，本瀬重政，井口哲郎，
子，山崎敏晴，太田和夫，高木洋太郎，本田俊彦，
子



〈編集メモ〉

企画展「若き日の宇吉郎」を準備して、加賀市の歴史や文化が、後の雪博士・中谷宇吉郎を育ててきたことが実感され、その面影は、現在の町の中にも残っていることを感じます。しかし、それらは、年々失われつつあるのも事実です。

企画展の内容を記録し、印刷物にまとめておきたいものですが、紙数が限られており、せめて記憶の種だけ残すことに努め、他日を期したいと思います。

❶ 旧大聖寺藩主前田利鬯の居宅。御前様の前でお話して喜ばれた。

❷ 旧藩主の家令。２年から小学校卒業まで下宿。

❸ 九谷焼の名工で赤絵を主とした。１年のとき下宿。

❹ 伯父・巳次郎が営んだ料亭。

❺ 母の実家で薬種商。ここから幼稚園に通った。

❻ 女子小学校の附属幼稚園。６歳で親元を離れ入園。

❼ 旧大聖寺藩邸。６年間通学。

❽ 落城伝説から、簪を挿した蛇が出ると信じられていた。古城山とも呼ばれた。

❾ 九谷焼の名工。父の厳命で英語を習いに通った。

❿ 五百羅漢のある曹洞宗の寺。習字を習い、静かな環境で夜遅くまで勉強した。

明治42年に錦城小学校が作成した大聖寺全図に宇吉郎の足跡を記入した。